

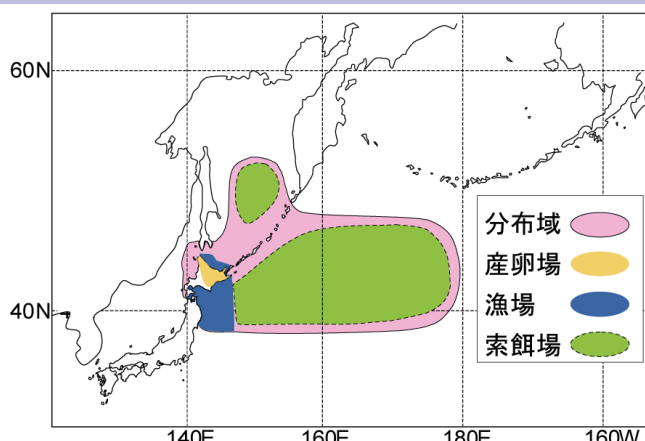
カラフトマス 日本系

Pink Salmon, *Oncorhynchus gorbuscha*



管理・関係機関

北太平洋遡河性魚類委員会 (NPAFC)
日口漁業合同委員会



日本系カラフトマスの主たる分布域 (高木ら 1982)

最近一年間の動き

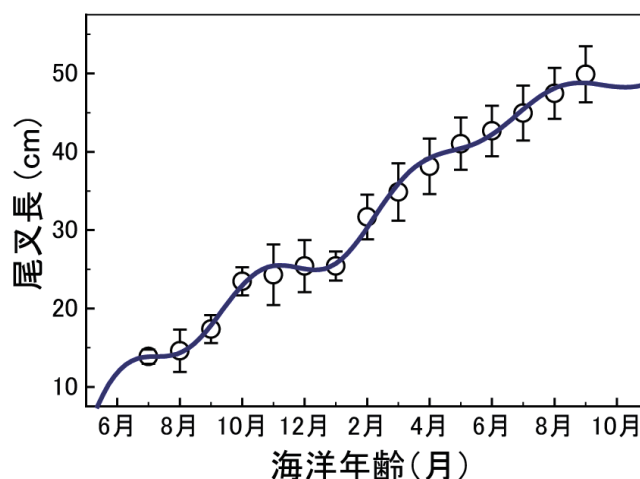
カラフトマスの2005年漁期の沿岸での漁獲量は820万尾であった。水揚げ単価は201円/kgで2004年に引き続き上昇した。水揚げ金額は前年比56%増の33億円となった。2003年以降には、沿岸漁獲数は、偶数年が不漁年で奇数年が豊漁年というパターンとなり、この傾向は2006年以降も継続し、2006年は不漁であったが2007年は11月中旬で1,340万尾の豊漁となっている。

生物学的特性

- 寿命・成熟年齢：ほぼ全てが2歳
- 産卵期：8月～10月
- 産卵場：北海道北東部に流入する河川
- 索餌期・索餌場：夏期・北西太平洋
- 食性：水生昆虫・落下昆虫（河川）、動物プランクトン・マイクロネクトン（海洋）
- 捕食者：ウトウなど海鳥・ウグイなど魚類（幼魚）、ネズミザメなど大型魚類・オットセイなど海産哺乳類（未成年・成魚）

利用・用途

用途は広く、塩蔵品、生鮮、缶詰等がある。魚卵製品として、筋子がある。



カラフトマスの月別平均尾叉長±標準偏差 (Ishida et al. 1998 より抜粋) と成長曲線。

カラフトマスの月別平均尾叉長と平均体重 (Ishida et al. 1998 より抜粋)

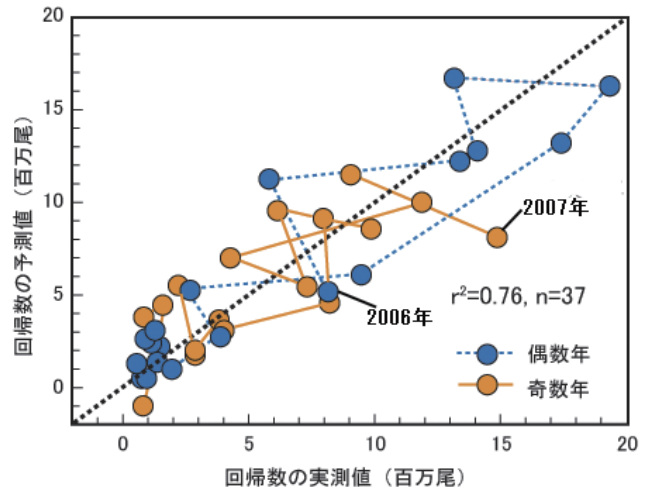
年齢	尾叉長(cm)	体重(kg)
0歳7月	13.9	0.03
8月	14.6	0.04
9月	17.4	0.06
10月	23.5	0.14
11月	24.3	0.15
12月	25.4	0.17
1歳1月	25.4	0.15
2月	31.7	0.32
3月	34.9	0.41
4月	38.2	0.58
5月	41.0	0.78
6月	42.7	0.92
7月	45.0	1.13
8月	47.5	1.32
9月	49.9	1.52

漁業の特徴

主に北海道北東部沿岸の産卵河川周辺で夏～秋季に定置網で漁獲される。広く北太平洋を回遊するが、北太平洋公海のさけ・ます漁業は禁止されている。他国経済水域内での漁獲量は不明である

漁業資源の動向

1970 年代から沖合域の漁獲量は減少し、沿岸域の漁獲量が増加した。沿岸漁獲尾数は 1990 年代に急増し、偶数年と奇数年の漁獲量の差も広がった。しかし、2003 年以降、偶数年・奇数年で豊凶が見られるもののその差は小さくなった。2006 年は不漁年で、その漁獲量は 9,609 トン (6.9 百万尾) であった。2007 年の沿岸漁獲量 1,340 万尾 (11 月中旬暫定数) で、1970 年以降 3 番目の漁獲数となっている。最近 5 年間の漁獲量は 0.9~2.1 万トン (6.1~14.1 百万尾) である。



日本系カラフトマスの回帰数の予測値と実測値の関係

管理方策

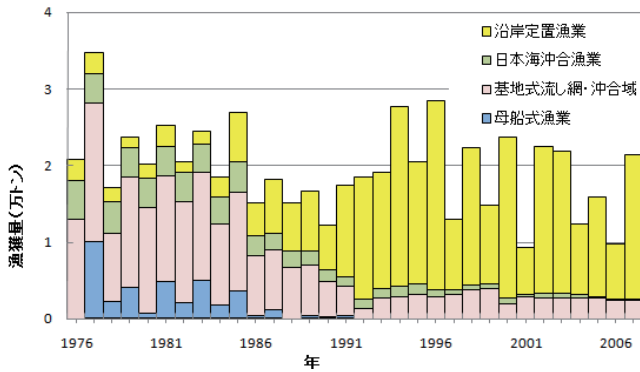
カラフトマスの再生産関係は偶数年と奇数年で回帰傾向が異なることから、それぞれの平均値から回帰数を予測し、現在の資源水準が維持できる河川遡上数を獲り残すという、産卵親魚量一定方策とした。今後は、放流効果と自然再生産量の定量的な評価を行い、索餌域である北太平洋の生物生産も考慮した資源管理方策を開発する必要がある。

資源評価まとめ

- 偶数年、奇数年の回帰傾向と平均値より回帰数を推定
- 偶数年、奇数年の回帰傾向が変化
- 資源は高位水準、横ばい傾向

資源管理方策まとめ

- 現在の資源水準の維持が管理目標
- 一定の産卵親魚量を獲り残すことが必要
- 自然再生量と放流効果の把握が必要



日本の漁業によるカラフトマスの漁獲量 (1976~2007)

資源状態

稚魚放流数は 1980 年代から約 1.4 億尾で安定しているが、回帰数 (沿岸漁獲+河川捕獲) は、1970 年代後半~1980 年代前半の約 1 百万尾から、1990 年代には 5 百万尾以上となった。1994 年以降、回帰数は 5~15 百万尾程度で年変動が非常に大きくなった。また、回帰数は 2 年前の回帰数、1 年前の冬の気温、2 年前の秋の降水量と相関が見られる。過去の資源量と沖合資源量調査結果の推移からも、現在の水準は高位で横ばい傾向にある。

カラフトマス(日本系)の資源の現況(要約表)

資源水準	高位
資源動向	横ばい
我が国の漁獲量 (最近 5 年間)	0.9-2.1 万トン 平均 : 1.4 万トン

